神奈川県大井町

神奈川県の南西部、首都圏から 70km 圏に位置している大井町。14.38km²とコンパクトな町ながら、西は酒匂川の松並木越しの箱根連山から富士山、南は相模湾の水平線、北東には丹沢山塊…と、変化に富んだ眺望が 360 度楽しめる。年間を通じ温暖で暮らしやすい気候に恵まれ、現在は 6,686 世帯、17,092 人が暮らしている。町の表玄関は、東名高速道路の大井松田インターチェンジ。そこから続く幹線道路沿いにはさまざまな店舗が並ぶが、丘陵地での畑作や果樹栽培、酒匂川沿いの稲作など、里山の風景も多く現存している。自然が身近にありながら便利さも兼ね揃えた地の利を生かし、「未病いやしの里センター（仮称）」の構想が進んでいる。

大井町の台地の風景から見える 30 の、かみさまを巡る

小田急線で新宿駅から 1 時間 20 分。隆起した台地がつづく丘には、富士山や大山、小田原の市街地や果ては横浜まで見渡せる場所があった。そこにはまだ里山と呼ばれる風景が残っていて、都会からは姿を消した「かみさま」が、まだ生きているのです。

01 赤田の鎮守の森のシイノキ

8 月 28 日

小高い丘の上に、樹齢 400 年といわれる大きなシイノキが立っている。その幹は大人でも抱えられないほどの太さ。大きな木の下には常に木陰ができていて、夏は涼しく、冷たい風雨は避けてくれる。その木の下に立っていると、「木の温もりを感じる」とは、このような感覚をいうのだろう。シイノキは 400 年もの間この場所にあり、土地の動静を見守ってきた。シイノキが生える場所からは、集落の家々の風景が見下ろせ、正面には、富士の雄大な姿を拝むことができる。すぐ近くには小さな畑がたくさんあり、地域の人々が四季を通じて畑仕事に勤しんでいる。シイノキのまわりに広がる景色は、まるで昔話に登場する日本の原風景だ。

2017 年 4 月 1 日 発行
発行元：大井町役場 相和地域活性化委員会
発行支援：ランドプレイン株式会社
監修・コーディネート：小宮 真一郎（活性化検討部会）
デザイン・写真・線画：玉利 康延（www.tamalog.me）
編集・文：小野 民
字：山本 安朗
印刷：株式会社イニュニック（www.inuuniq.jp）
文章協力：鈴木 勝、鈴木 裕也、香川 倫幸

お問い合わせ先
30 のかみさま 案内所
（ブルーベリー旭）小宮
☎ 090-5406-7149

大井町役場
地域振興課
☎ 0465-85-5013

02

12月6日

良い風の吹く

百日紅の丘

神奈川県大井町は珈琲を持って、ピクニックに行きたくなるようなところだ。ちょっと登ってみたくなるような地形の小高い丘が連続しており、そこから北西に富士山、南西に小田原市街地と伊豆方面、北東に丹沢・大山、南東に横浜・湘南方面と、神奈川県がぐるりと一望できる場所にある。

空にちょこっと近い里山

初めてこの土地を訪れたときに感じたのが「こんな場所がまだ神奈川県に残っていたのか」という思いであった。戦後高度経済成長とともに起きた急激な宅地化の波は、バブルが崩壊した後も継続し、ついには神奈川県全域を東京都のベッドタウンとして埋め尽くす勢いであるかの如くふくれあがっている中、このような希有な里山がまだ残っていたとは。

古代・中世の道

東名高速道路の大井松田インターチェンジを挟んですぐ隣の丘でもあり、現在、丘の下には小田急小田原線とJR御殿場線の通るこのあたりは、古くから交通の要衝であった。相模の国の大山信仰が盛んだった頃、西日本からやってくる人々は、矢倉沢往還（やぐらさわおうかん・平安時代〜）を通って駿河国の沼津から、または大山街道（おおやまかいどう・江戸時代〜）を通って小田原から大山を目指す途上、このあたりを通った。

古代の危急存亡のとき

更に遡ること今から 2,400 年前の縄文時代の終わりから弥生時代のはじめ頃、夏になると百日紅（サルスベリ）の咲き乱れるこの丘から、海より新たに出現した平野を見下ろし、国造りを計画した一団がいたかもしれない。本頁は、その彼らが見下ろしていたであろう、まだ人が住んでいない足柄平野を想像して書いている。（下記 図参照）彼らは、春には山菜、夏には魚介類、秋には木の実、冬には狩猟という森の恵みをいただく狩猟採集の丘や山地での暮らしをしていた。それが急激な寒冷化によって平均気温が 6 度下がり突如崩壊し、それまで日本列島に居たといわれる40 万人の人口が、9 万人まで激減するという、食料をめぐって危機迫る状況にあった。

関東の稲作のはじまり

それと同時期に弥生小海退（やよいしょうかいたい）と呼ばれる、気象の変化がおこる。海水面が 2メートルから 4 メートルほど下降し、新たに平野が出現した。酒匂川はまだ今のように整備された河川ではなく、暴れ川で台風のたびに平野部の流れる場所が変わる湿地帯であっただろう。水をつかって大陸からやってきた稲作文化を取り込んで、この土地で水稲（すいとう＝水を使った稲作）を始める一派が現れた。

ちょうどこの頃、2,000 年前の集落跡が残っている。現在の小田原の市街地の近く、海から 1.5kmの地点にある中里遺跡は、関東地方の弥生時代の集落としては最初期のもので、近畿地方方面からの入植者が在来の人々とともに水田耕作をしながらつくった集落と考えられている。大陸から伝わった稲作の技術が、縄文時代の終わりの人々を飢えから救い、広大な土地は稲を育てるのに適していたため、大部分の人々はこの台地から平地へ移り住んでいったのだろう。平野は狩の獲物も、木の実も少なく、狩猟採集の時代が終わる。

丘に残った人たち

平地に人々が住み始め、稲作が大々的に行われる時代になってから更に時代は進み、鎌倉時代には平家方に味方をしたことから戦火に巻き込まれながらも、更に時代が進んで、戦国時代のはじめに北条氏が小田原の城郭を張り巡らせた時代になっても、丘の上に人々は営々と住み続けてきた。

現在、多くの人々は平地に住み、この地域もまた急激な過疎化高齢化の波のど真ん中にあり、行く先を模索している。ひょっとしたら、時代を遡ると小田原の人々の起源のひとつかもしれない、そんなことを誇りに思いつつも、この土地の良さはやはりその良い風の吹く丘からの圧倒的な眺めなのだと思う。縄文の人々が新たな国をつくるために見下ろしていたであろう風景。この百日紅の丘を含む地域を総称して地元の人達は相和（そうわ）と呼ぶ。相和の人々は、今日も小田原の景色を眼下に眺めながら、空にちょこっと近いところで暮らしている。

文：玉利 康延

相和（そうわ）地域について

神奈川県大井町の東側半分を占める台地の上のことを、相和地域と呼ぶ。この台地は 水田の多い「山田」、古代の道の合流点にあり渋沢から大山へ抜ける道のある「篠窪」、表紙のシイノキのある「赤田」、稲荷社を中心とした集落「柳」、大井町で最も標高の高い「高尾」という特徴的な五つの地区となっている。

かつて、各集落は、治めた領主が異なったため、800 年以上に渡り、常に争いが絶えなかったが、昭和 21 年（1946 年）、五つの集落がついに一つになり、相和村となった。「相和」という村の名前は、互いに親しみ仲良く、相和（あいわ）してほしいとの願いから付けられた。昭和 31 年に大井町として市町村合併した後も、先人の平和への想いとともに、その名前は生き続けている。

どこからでも富士山が見える

2月16日

03
早咲き桜と富士山

「大井町農業体験施設 四季の里」を出て少し坂を登ると、すぐに足柄平野が一望できる場所に立つことができる。2 月半ばには、目の前には桜のピンク、広大な平野の奥には、堂々とそびえる真っ白な富士山を見ることができる。雪の富士と、いち早い春を告げる早咲き桜のコントラストには、息をのむ美しさがある。

少し移動すると、大井町の名産になりつつある果実、フェイジョアの畑が見える。見慣れぬ木々の間からは、となり町である中井町、よくよく見れば横浜のランドマークタワーまで見渡せる。丘の上から神奈川県の地形が手に取るように分かるのだ。

ここは、相和地域ならではの風景を感じてもらおうとつくられた見晴台として知られる。富士山と同時に見える大山も、相和の人々にとっては大事な山だ。2017 年初春にはここに、大山と富士山の物語である「富士宮浅間神社の言い伝え」を紹介した看板が新たに設置された。昔話の絵巻風のやわらかなイラストで大山と富士山を背景に見つめ合う父と娘が描かれ、こんな言葉が添えられている。

その昔、大山津見神には、桜が咲いたように美しい娘がおりました。

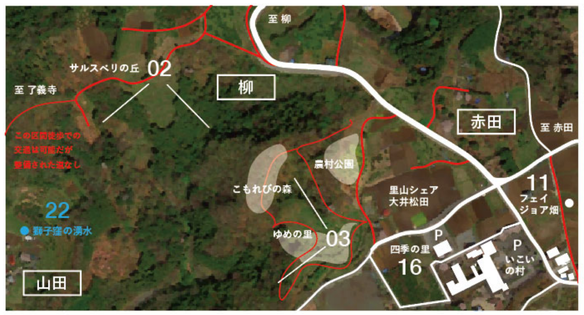
姫にすこやかな子が生まれたお祝いに、父は富士山を与えました。

今もおだやかに富士（むすめ）を見守る、大山（ちち）の姿があります。

11月4日

日本一の富士山も、ここでは身近な「ふるさとの山」。起伏の多い相和では、集落によって全く異なった富士山の表情を眺め、また見守られながら営みが続いてきた。見晴の良い「ゆめの里」がある柳地区は約 30 戸に 110 人ほどが暮らす畑作地帯。隣の赤田地区は、土壌が赤土だったことから「赤田」と呼ばれるようになった。現在は、約 70 戸に 220 人ほどの人が暮らす、畑作が盛んな地域だ。もともと水田に向かない土地柄だったことから、みかんやキウイなどの果樹のほか、多品種の野菜が育てられるようになった。四季の里の直売所には、柳や赤田を含む相和地域で採れた農産物が多く並ぶ。

大井町が取り組む「おいしく、フレッシュな“農”を楽しむ町」の舞台となるのも相和地域で、その中心となるのが四季の里の周辺地区だ。町では、「大井町農業体験ガイドブック」を発行するなど、ふだん土と触れ合う機会の少ない大井町の住人や、都市圏に住む人々にさまざまな農業体験の機会を提供している。



相和に来たら四季の里のすぐそばにある「いこいの村あしがら」に立ち寄るのもおすすめ。相和地域唯一の宿泊施設であり、日帰り温泉の入浴も可能だ。足柄平野から湧き出した温泉につかりながら富士山を眺めるのもまた一興である。

いこいの村あしがら

【宿泊】
1 泊 2 名 10,800 円～（朝・夕食付き）

【日帰り入浴】
時間：11:00 ～ 14:00（受付 13:30 まで）
18:30 ～ 21:30（受付 21:00 まで）
料金：大人 700 円／子供 400 円（4 才～ 12 才）
定休日：月曜日
（ただし月曜が祝日の場合翌日定休日）

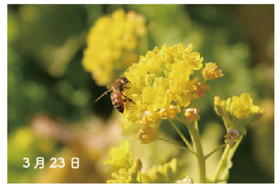
【軽食・食事】
レストラン「さかわ」
昼食：11:30 ～ 13:30 ／夕食：宿泊者のみ
問い合わせ先：☎ 0465-82-2381

04
段々畑と富士山

相和らしい景色のひとつに、段々畑と富士山の取り合わせがある。特に篠窪の高台に立って眺める段々畑は格別だ。ただ、斜面にある畑のひとつひとつは小さくてトラクターは入れないし、この地域で「まま」と呼ばれる畑の段と段の間の斜面の草刈りにも苦労が多い。這いつくばるような格好で常に足を踏ん張って草刈機を操ることには、危険も伴う。それゆえ、篠窪の高齢者には腰が曲がった人が多いという。でもそれは、農家の勲章のようなもの。厳しい環境だからこその気概が篠窪の農業を成り立たせてきた。

篠窪は室町時代に二階堂政貞が築いたとされる屋敷跡が残る集落。二階堂氏が一族でやってくるまでは、3 戸ばかりの小さな集落だったのが、武家一族によってがらりと様子が変わったとされ、現在は約 70 戸の家からなる。起伏の激しい畑が多く、過酷な農作業が強いられる土地柄ではあったが、葉たばこ、三つ葉、落花生、みかん、栗…時代の流れに則って、柔軟に土地に合うものを模索してきた。作物の栽培技術を磨く気概の強い土地柄で「仲間たちで切磋琢磨していいものを生み出してきた」と長年の農家は振り返る。

3 月、相和地域のいたるところで見かける菜の花は、かつては里山の暮らしに不可欠なもので、篠窪でも菜種油を採るために栽培し、自給自足に近い生活を支えていた。さらに、作物を育てるうちに痩せてしまう土地のあとに菜の花を育てると、次に育てる作物の肥料になる。化学肥料がない時代の工夫は、今あらためて注目されている。


3月23日

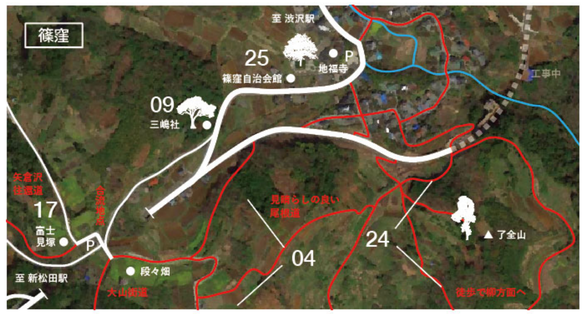
いま、相和の知る人ぞ知る篠窪の名産品に、「塩漬け桜」がある。確かに、早咲きから次々とリレーのように桜の彩りが続くこの地に、ふさわしい一品だ。大井町周辺のエリアで、全国シェアの多くを賄うという。

4月22日

塩漬け桜になるのは「関山」という品種の八重桜で、篠窪のそれは特に、深いピンクが身上。50 年前、篠窪に在った株式会社小松製作所が、地域の人へと全戸に桜の苗木を送ったのがはじまり。その苗をもとに、濃い色の花が咲く木を接ぎ木しながら育成した、手間暇をかけられた木々なのだ。

篠窪の春の風物詩には「花見」だけでなく「花摘み」が含まれる。4 月半ばの収穫期は、1 週間から 10 日。今では人手不足で摘みきれないほどの桜に追いかけられるように、忙しい日々が続く。なかには、毎年この作業を手伝いにくるのを楽しみにしている人もいるという。

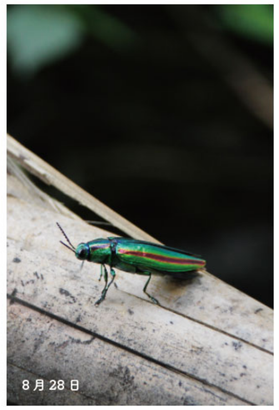
自家用にする以外は、集落 3 箇所の集荷場に集めてその日のうちに出荷。桜の花びらは、「とにかく鮮度がいのち」の農産物なのだ。出荷された桜は、工場でもすばやく加工して漬け込まれ、やがて塩漬け桜になる。この桜を使ったご飯やゼリーなどが供されると、誰もが「わぁ」と歓声をあげる。桜がもたらす華やいだ気持ちは、みんなが共通して持っているもののようだ。



2月23日

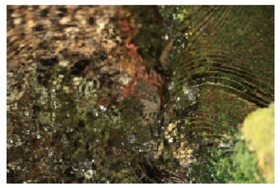
05
玉虫

光沢を帯びた緑色の姿から、ただならぬ高貴さを醸し出す玉虫。その姿は、とくに人工物が少ない太古の人の心を、つかんで離さなかったにちがいない。金属のような光沢は、死後も色あせないため宝飾品に利用されてきた。なかでも、法隆寺宝物「玉虫厨子」の装飾は、時代を超えた名品として今に伝えられている。玉虫の羽は、幾層にも重なっていて、光を乱反射して輝きを増すのだそうだ。その姿かたちから、珍しい昆虫のイメージを持つが、実は日本だけで 200 種類以上の種類がいる、里山の身近な昆虫。幼虫は木の中で成長してさなぎとなり、7 月頃になると脱皮して、暑い空を飛び回る。多くはヤマトタマムシという種類で、近年減少しているともいわれるが、相和地域ではたびたび目にすることができる。頭上高くを飛ぶ玉虫は、エメラルドかと見紛うほどの輝き。地上に降りてくるのが珍しいので、捕まえるのは大変だ。


8 月 28 日

06
獅子窪の泉

夏はひんやりと冷たくて、冬はやんわりと温かい。いつも、地下から静かに湧き出す獅子窪の泉は、年間の温度が変わらず、いつも美しい水を湛えている。



四季を通じて人々に憩いを与え、山田の水稲栽培を支えた菊川の源流のひとつである湧き水は、相和地域に点在している湧き水の中でも最大の水量を誇る。獅子窪集落の発祥の地と伝えられるこの泉。かつては目の前に水田があり、暮らしの中心にあったが、いまはひっそりとした佇まいだ。ただし、実は蛍の隠れスポット。例年 6 月中旬頃には人々の目を楽しませてくれる。

07
山田の水田とはざがけ

原初、居住に優れた条件は、世界中の多くの場所で共通していた。水があって田畑をつくることができること、薪があって火を扱えること、風水害が少ないこと…ここは足柄地域の中でも、特にその条件の整った場所であった。そのことをあらわすように、足柄地域の住みよい場所の表現として「一内山、二山田」という言葉が残っている。ちなみに、内山（現在の南足柄市内）の順位が先なのは、陽が早く昇るためらしい。山田地区の稲作の歴史はとても古く、いまから 2,400 年前の炭化米の出土場所として、考古学界では有名だそう。その頃は水田を利用しない陸稲を栽培していたと考えられるが、のちに 22 番 須賀社から湧き出る水の恩恵を受けた水田が、この平

9 月 26 日

地一帯に広がっていった。高低差の多い相和で、稲作を中心とした農業が続いてきたのは、好条件の揃ったこの地の特徴のひとつだろう。昭和30年代まで耕耘に欠かせなかった牛が姿を消して、トラクターに変わったが、細々と自家用に受け継がれているからこその手間暇かけた農作業は健在。大規模化を免れ、地形に沿ったさまざまな形の田んぼが寄りそう。収穫期を迎えた 9 月下旬、黄金色の田んぼや、「はざかけ」された稲わらが田んぼに並ぶ様子は、しみじみと里山らしい景色だ。

08
観音念仏

山田地区を見下ろす場所に、観音様を祀る小さな公民館がある。昔、この地域では災害が多かったが、「ふもとに祀られていた観音様を高台から見守ってほしい」との想いで高台に祀るようになったところ、災害がなくなったと言い伝えられている。毎年、観音様の姿を拝むことが叶う日は 4 月 18 日だけ。毎月 18 日の「観音の日」には、山田地区の女性たち数人がこの場に集い、車座でご真言を唱えながら数珠を回し、続いて「観音様行儀」が始まる。そこにあるのは、日常と地続きの真摯な祈りの姿。「お唱え」とともに叩かれる鐘の音が、集落に響きわたる。　写真提供：加藤 美和

09
三嶋社の樹齢 800 年のシイノキ

三嶋社の鳥居の脇にしっかりと根を張ったシイノキの大木。道路を覆うように伸びた幹と繁茂した枝を、鉄骨が支えている。推定樹齢は 800 年。相和で最も古いシイノキは、町指定の重要文化財でもあり、神奈川県の名木 100 選にも登録されている。三嶋社の境内には、この古木を筆頭に樹齢数百年を超える木々が生い茂り、相和で見られる常緑樹のほとんどを一堂に見ることができる。（『鎮守の森の椎木と巡るいのち』ページ参照）

豊かな植生は、貴重な動物を育む最後の砦でもある。たとえば夜空を飛び回るムササビは、冬眠をしないため、常緑樹の住処が必要。三嶋社のシイノキに住みついていたこともあったそうで、暗闇の中で「キュルルル」と鳴き声が響いていたという。鎮守の森で耳をすませば、さまざまな生き物の息吹を間近に聞くことができる。

10
吾妻山の鎮守の森

かつて地元の人に親しまれていたが、森に飲み込まれかけた遊歩道があった。今、ここに社屋を構えるコーヒー販売業のブルックス社の造園チームが、"未病いやしの里センター（仮称）"の一部として手入れを始めている。遊歩道の最高地点は、快晴なら遠く伊豆の島々まで見渡せる、ビュースポット。そこは、「吾妻社」のある "小さな鎮守の森" が佇む場所でもある。「ここに鎮座する石祠は、ヤマトタケルが当地で休息したことにちなんで祀られた、と伝えられていて、隣には妻オトタチバナヒメの石像も。また、江戸時代には吾妻山のふもとの『最明寺』の境内の一部だった縁で、現在でも毎年 1 月 16 日には、住職を招いた例祭が執り行われています」とは、緑地管理課の鈴木勝さん。鎮守の森には、さまざまな木が生息し、御神木と思しき根回り 12mものスダジイの巨樹、神の宿る木といわれ葉は魔除けや縁結びの護符に使われた歴史もあるナギの木、鎮守の森に続く道にはポプラの木が天高く伸びる。未病いやしの里センター(仮称)は、2018年春までに一部を開設予定。現在は毎日平日8時〜17時までなら、ブルックス社の鎮守の森の敷地内は散策可能だ。

11
フェイジョア、半世紀越しの産地化

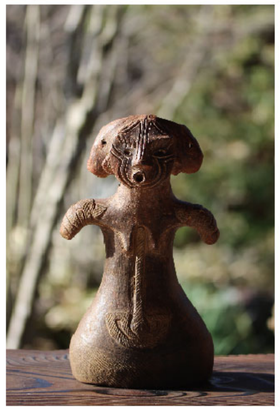
みかんと同時期、1960 年代に導入されたものの、見たこともない果実の使い道に困り果て、畑の隅へと追いやられていた果物がある。片隅で、細々と栽培されてきた実は、2012 年に再び注目を浴びるようになる。「大井町スイーツセレクション」として地元の農産物でのスイーツの開発が始まったとき、「フェイジョア、なんとかならないかい？」と栽培を続けていた農園主がひと言。それがきっかけで、さまざまなフェイジョアスイーツが生まれ、ここ数年で町の特産品として栽培されるまでに。温暖な地域での栽培に適しているというから、相和との相性はぴったりで、11 月の収穫期には直売所でも購入可能だ。緑色の卵のような果実は、収穫期を迎えると芳しい

11 月 4 日

香りを放つ。「そのまま食べるなら、2 つに割って中身をスプーンですくって食べるのがオススメ」とは、地元のフェイジョア農家を支える大井町役場地域振興課の古矢仁さん。食べるとラ・フランスを少し硬くしたような食感と香りが口に広がる。煮詰めてジャムにしたり、アイスクリームや焼き菓子にしたりと、加工品としてのポテンシャルも高い。今はまだ、幻の果実フェイジョア。相和の看板果実の仲間入りを果たすべく、食べ方・育て方の研究が続く。

12
中屋敷遺跡の土偶形容器

今から 2,400 年前、寒冷化により人口が激減し狩猟採集の暮らしから稲作中心の暮らしへと移行する直前の時代の数少ない遺跡である「中屋敷遺跡」から出土した土偶形容器は足柄平野の弥生文化のあけぼのを象徴する。昭和 9 年、地中 1 メートル 20 センチの所から発掘され、現在は国重要文化財に指定されている。この土偶、高さ 26.7 センチ。中は空洞になっていて、正確には土偶型の骨壺であり、中には幼児の骨と歯が納められていた。残された人々が、再び家族のもとに帰ってきてほしいと土器を母胎に見立てて命の再生を願ったのではないかと考えられている。個人蔵のため通常は非公開だが、ルーブル博物館、大英博物館、東京オリンピック国宝重文展示会など、世界の有名美術館で展示されてきた。



13
了義寺の杉戸絵

山田地区の了義寺には、かの有名な水墨画家・雪舟の流れをくむ女流画家・桜井雪保が描いた見事な杉戸絵がある。1794年に描かれたという12 枚の杉戸は、町指定の重要文化財で、たまにしかお目見えしない。その筆致はたくましく、大きく描かれた虎を前にすると、その迫力に圧倒される。杉戸を据えられたお堂は、計画から 15 年の月日を経て1791年に再建されたもの。火災により 40年もの間本堂がない状態にあったが、山田の豪商曾根惣右衛門に懇願して、建築にこぎつけたという。総けやきづくりの荘厳な構えと、仏間を仕切る雪保の絵は、この場で描いたからこその絶妙なバランスだ。しかしかつて、研究者を名乗る人が「こんな場所にもったいない絵だ」と発言したことがあったが、住職はこう返したという。「地域の寺として誰もが身近に感じる場所にあってこそ、絵は生きるのだ」。

11 月 22 日

14
柳の若手農家 鈴木さんの挑戦

その昔、山の上に柳がたくさんあったことから名付けられた「柳」集落。30 数戸の小さな集落は、相和地域の中でも日当たりの良い比較的平らな土地だ。かつては酪農も盛んで、のどかな農村風景が見られた。しかし近年、農家の高齢化と後継ぎ不足で休耕地が増加しているのは、日本の多くの地方の例にもれない。そんななか、1 人の柳地区の若者が、「食」「農」を起点にした取り組みをはじめている。「「食」を真剣に考えるきっかけになるのが農業の魅力」と語る鈴木裕也さん（36）。収穫体験の喜びを小さな子供たちに味わってもらおうと毎年、地元の園児を自分の畑に招いてきた。

「農業を体験した子供たちは、食べものに感心を持ってくれるのではないでしょうか。農業から、食育へ繋げていくのが今後の目標です」と情熱的に語る鈴木さんは、今後はさらに畑の規模を増やす予定。地元以外の子供たちにも、相和の畑を通して「人と自然の調和の大切さ」も伝えていきたいと決意を新たにしている。

15
稲荷神社のきつね

柳地区には、安産の守護神として人々から崇拝されている稲荷社がある。境内には、八幡宮と大きな夫婦銀杏もあり、その佇まいはパワースポットのおもむきだ。稲荷社の中には、奉納された陶器の狐が所狭しと並んでいてその密度に人々の願いの重みを感じる。残念ながら普段扉は閉ざされているが、人々の強い願いが込められた稲荷社から発せられる空気は独特のものがある。安産の祈願には、稲荷社の白狐の置物一体を拝借して帰り、出産後に借りたものと、一回り大きな一対の白狐を奉納しお礼参りをすることになっているそう。すぐそばに夫婦銀杏があるのも、偶然ではないのだろう。町の重要文化財でもある樹齢 1,000 年の銀杏から垂れ下がる「乳」と呼ばれる部分の樹皮を煎じて飲むと、母乳がよく

出るといわれていた。稲荷社は集落の人々の鎮守として大切に受け継がれており、古くからの習わしが生きているのが柳地区の特徴だ。身近なところでは、各家が屋号で呼び合うのも昔のまま。ハレの日の祭礼は、2 月初午と 10 月 25 日に決まっていて、新米、根のものの野菜、葉のものの野菜、魚、塩、水、果物を供えて行われる。もうひとつ忘れてはならないのが、「おひまち」。200 年前から子供たちによる行事が続いていて、現在は毎月 21 日に近い土日に行われている。土曜日に稲荷

12 月 11 日

社境内に子供たちが集まり、柳地区の各家庭を回って米を集め、日曜日に当番の家で赤飯のおにぎりにして配る。子供が願いごとを叶える行事で、昔はとくに、お産がある家庭の安産祈願が欠かせなかったらしい。もはやこのような子供の役割が残るのは、柳をおいてほかにはない。貴重な伝承である。

シイノキネットワークを辿る道

矢倉沢往還道

矢倉沢往還（やぐらさわおうかん）は、江戸時代に整備された街道で、江戸赤坂門から相模国、足柄峠を経て駿河国沼津宿を結び、大山への参詣道ともなっている。東海道の脇往還としても機能し、現在は、ほぼこの旧往還に沿って国道 246 号が通っている。

律令時代には東海道の本道にあたり、「足柄道」（あしがらどう）または「足柄路」（あしがらじ）と呼ばれていた。万葉集に収録された防人の歌にも登場することから、8 世紀頃には東国と畿内を結ぶ主要道として歩かれていた様子がうかがえる。

大山街道 小田原道

大山街道（おおやまかいどう）とは、主に江戸時代の関東各地から、相模国大山にある大山阿夫利神社への参詣者が通った古道の総称。その中で、小田原方面から北上し相和地域の篠窪の富士見塚で、矢倉沢往還と合流し、渋沢を抜けて大山の蓑毛に達する、巡礼の道である。

シイノキネットワークとは

日本列島に人が住んでいなかった大昔、現在の西日本からこのあたりまでの地域には、冬も緑の葉をつける シイノキを中心とした常緑広葉樹が広がっていた。シイノキやタブノキの林は世代交代を繰り返し、この台地に現在も生えている樹齢 100～800 年くらいの巨木は、それが現在まで残ってきたものと考えられる。

これらは、昔の道沿いにあったり、丘の上にあって行き先を示していたり、社や、道祖神など何らかのかたちで祀られていて、村人との深い関わりを象徴しており、その結果、必ずといっていいほど風景を見下ろせる場所に生えている。

シイノキ同士が、何かを共有しあいながら共存し、ネットワークを張り、現在まで何千年もの間大地と村を見守り続けてきたように思える。

国道・県道
車道
鉄道
後世に造った道
未整備道
古道
トンネル・山かげ
河川

16
四季の里の祭りとピザ窯

「四季の里直売所」を中心に、春は「花まつり」、初夏と秋にはじゃがいも、さつまいもそれぞれの「いもまつり」、冬は「みかんまつり」と、毎年恒例の祭りを開催している。小さな子供でも楽しめる内容で、それぞれの祭りは1,000 人ほどの人出で賑わう。人気は、そのときの旬を使ったピザ。いもまつりではじゃがいもやさつまいものピザ、みかんまつりではみかんピザづくりに予約が殺到する。直売所の横に備え付けられた石窯で焼くピザは、ちょっとした名物になっている。ほかにも、普段はなかなか食べられない「フェイジョアカレー」などの特産を利用した弁当が並んだり、収穫体験ができたりと、相和の食と農を堪能できる機会になっている。

「四季の里直売所」
営業時間：8:00～15:00
定休日：月曜日（祝日の場合は翌日休み）
神奈川県足柄上郡大井町柳 265
祭りについては☎0465-82-3751へ問い合わせ

17
源頼朝の富士見塚

いまから 800 年前、源頼朝が、軍事演習を兼ねた大規模な狩猟「富士の巻狩」の折に、馬を止めて富士山の素晴らしい眺めを鑑賞したといわれる標高 250 メートルの峠である。富士見塚は、足柄古道とも呼ばれ、万葉集にも登場する「矢倉沢往還」の一里塚であったともいわれる。ちなみに一里塚とは、旅行者の目印として街道沿いに 1 里毎に設置した土盛りで、いまも各地で見つけられる身近な歴史遺産だ。春にはソメイヨシノと富士を眺めることができる。この高台の塚に立てば、西国へ想いを馳せた、当時の旅人の風情や源頼朝が見た景色を、追体験できるかもしれない。

18
大井町のチベット　最も高いところにある大根畑

なだらかな丘の続く地域のなかでも比較的標高が高いのが高尾地区で、「大井町のチベット」と呼んでも過言ではない。ここには大井町の最高地点 307.8 メートルの「竹山」があり、下流の中村川までの標高差が急峻な谷間を形づくっている。つねに川へ気流があるため、空気が澄んでいて眺望が良い土地に、25 戸の家がひしめき合うように並ぶ。道も細く、竹山に登っていくには軽トラで上がっていくしかないが、道の両脇から見える景色は絶景だ。

19
麦打ち唄

♫ 曇らば 曇れ 箱根山
晴れたとて 花のお江戸は見えやせぬ

昔、篠窪地区で麦打ちの時に歌われてきた「麦打ち唄」の歌詞だ。晴れた日を選んで行われる麦打ちは、となり近所が集まり、収穫した麦を脱穀する作業であった。一度は廃れていた「麦打ち唄」は、1970 年代に踊りをつけて復活した。その立役者は、当時相和小学校に赴任したばかりの古矢比佐子さん。「当時の相和小学校に集っていた、先輩教師たちの土地への愛着や情熱に、感化されたんです。自分の得意分野をのびのびと発揮できる環境だったので、かつて地域で親しまれてきた唄に踊りをつけて、子供たちへ継承することができました」と語る。以来、地元の相和小学校では、年に一度の運動会のときには、全校生徒が輪になって、クルリ棒で麦を打つ動作を模した「麦打ち唄の踊り」に親しんでいる。（写真提供：大井町役場 1980 年）

中腹、標高 150 メートル付近の南側には傾斜している畑が約 2 ヘクタール。一枚一枚は小さな畑だが、陽当たりが良く冬作に最適だ。ここで２軒の農家が年間を通して育てる大根は、「高尾の大根」として知れ渡っている。南向きの斜面の地の利を生かした冬大根がメインで、８月に種を蒔き、10 月中旬から３月中旬にかけて収穫する。面積は少ないが 5 月から 7 月頭にかけて収穫する夏大根は、冬大根の収穫が終わった真冬の畑に寒さを防ぐトンネルといわれる覆いをかけて栽培している。

20
道祖神とどんど焼き

集落のなかに悪いものが入ってこないようにと、古くから道の辻や集落の入り口に祀られている「道祖神」。大井町内には 46 カ所 60 基があり、相和地域に限っても17カ所、25 基の道祖神が点在している。町で一番古い道祖神は 1671 年６月14 日と刻印されている篠窪の「入方の道祖神」で、神奈川県内でも 6 番目に古い貴重なものだ。道祖神は子供と縁が深い存在で、病気から子供を守ってくれる神様、子宝を授かる神様などとしても信仰されてきた。子供が石塔を叩けば叩くほど願いが叶うという習慣の地域もあって、一部が破損している道祖神もある。

1 月 14 日の午後、どんど焼きの日にはどこからともなく太鼓の音が聞こえ、のろしのような煙が各集落から上がる。松葉などで囲った道祖神のすぐそばで、書き初めや古いお札などを焚き火にくべ、その火で団子を焼く風習が今も残る。しかし、昭和 20 年代までさかのぼると、さらに子供が主役の行事の体をなす。１月４日頃に道祖神の側に小屋を建て、男の子たちは、どんど焼きの日まで毎晩そこに寝泊まりするのが習わしだったそう。さらに第二次世界大戦前まで時代を移せば、子供たちが太鼓を叩いて集落を歩き、悪魔払いの呪文を唱えて回ったという。親元を離れて小屋を守る数日の小さな冒険を、年配の人は懐かしそうに振り返る。

いまや、どんど焼きを道祖神の側で行う集落も数えるほどで、その役割も忘れられがちな現状もある。だが、道祖神はいつの日も人知れず集落を守り、道行く人の祈りを聞きながら、道端に佇んでいる。

21
金山社のシイノキ

急峻な土地にひしめきあうように立ち並ぶ高尾地区を見下ろす場所。樹齢は数百年にはなるだろうシイノキが並ぶ森の中に、高尾の鎮守『金山社』は建っている。「こんな急な坂ばかりの土地に 70 年以上住んでいるが、いままで台風や大きな地震がきても、不思議と土砂崩れなど体験したことがない。それは、私たちを見守ってくださる鎮守の森と神社のおかげだと思うよ」と長老は語る。集落を守ってもらっている感謝のあらわれとして高尾地区の 18 戸の氏子が集落の神社をお祀りしていて、毎年４月７日の前後の土曜日に春の祭礼が行われている。

22
山神のクスノキと第六天さんの湧き水

山田地区と篠窪地区の境目にある 岬の突端のような場所に、一本のクスノキが生えている。目の前が海だったらここは灯台のような場所だろうか。一部枯れてしまって、今はちょっと変わった形になってしまったが、かつては相模湾を行き来する船の目印となっていたという。このクスノキを祀る香川家のご先祖からの伝承によると、山神が棟木を与えてくれたという。以来 香川家では 山神に感謝して、毎年欠かさず祭祀を行い、若き倫幸さん（32）が継承する。

道路を挟んで隣接する香川さんの土地に、山田地区を流れる「菊川」の水源のひとつとなっている湧き水がある。今は、ゴルフ練習場と大井松田インターに遮られているが、現在でも山田地区の水田を潤している水源である。

「須賀社」という石の祠があり、氏子連中が親しみを込めて「第六天さん」と呼んでいる。まさに御神体である「山」と、そこから湧き出る水を引いた「田」から山田地区は始まった。現在も、上山田、西庭地区の住民がその氏子となり、毎年元旦の初詣と４月８日の祭礼が執り行われている。

23
天神社春の祭り

山田地区の水田地帯に、ぽっかりと浮かぶ浮島のような鎮守の森がある。かつて「夢見の里」と呼ばれていたこの森の中に、山田総鎮守の『天神社』は建つ。約 40 年前から続く、地元の子供たちが樽神輿を担いで山田の三つの地区を練り歩く行事は、春の風物詩。毎年３月の最終日曜日の朝９時から始まり、午後 2 時頃まで近所を練り歩く。「厳かな祭祀で、土地の平和安寧（あんねい）、五穀豊穣を、神主と深い絆で結ばれた同志で祈る。これが重要なんだ。宮世話人をやるまではわからなかったが、『無私の心』というものがあることを感じたよ。その後、神輿とともに地区を回り、山田の先人の霊に『今生きている私たちは元気にやってるよ』という表明をするんだ」。祈念祭、例祭、新嘗祭、年末の大祓えと節目の祭祀を支える 7 人の宮世話人の代表者は、熱を持って後世へ継ぐべき祭りの意味を語ってくれた。

24
了全山　かつての王が眠る墓

篠窪地区を見下ろす 標高 276m の小高い丘は、地元の人々に「了全山」（りょうぜんさん）と呼ばれ、集落の歴史を見守ってきた。頂上には、常緑のシイの林があり、その麓には小さな石のお墓が、ひっそりと佇んでいる。ここに眠っているのは室町時代に篠窪の集落を治めた二階堂政貞である。まだ数戸しか家がなかったといわれる篠窪の歴史は、二階堂氏が、当時武士の間で信仰されていた臨済宗の寺院「宝珠山 地福寺」を、1347 年に建立したことから始まる。

二階堂政貞が 1394 年に没した時に、篠窪の村と鎌倉を眺められる場所に埋葬してほしいという遺言から、一族が眠る地福寺とは別の、寺の向かいにある小高い丘に埋葬された。いつしか、政貞の眠る山を村人は「了全さん」と呼び、親しみ敬ってきた。以来、600 年以上に渡り、篠窪の民は政貞の命日４月11日に念仏を唱えている。

この場所は近年、地元の「NPO法人しのくぼ」のみなさんが整備し、工事中の道の脇から登っていくことができるようになっている。登り口には柿の木があり、そこが目印だ。小高い丘は、頂上部分にのみ常緑のシイの林が忽然と、そこに墓を守るように生えていて、頂上まで到達するとここもやはり良い風が吹いている。

周辺は、まるでスペインの巡礼路のような、なだらかな丘の風景が続いており、ついつい歩いてみたくなる道がある。その先にはみかんを貯蔵しておくための「みかん小屋」があり、牧歌的な風景が広がっている。

25
しのくぼ茶屋

2015 年 11 月１日、篠窪自治会館を舞台に「しのくぼ茶屋」がオープン。その後、折に触れて開店する１日限りのお茶屋さんを、集落内外の人々が楽しみにするようになった。もともと茶屋の構想は、危機感から。かつては、にぎやかだった集落もいつの間にか、二人以下の家庭が半数、小学生がいるのは数戸だけという、典型的な過疎状態になっていた。しのくぼ茶屋の発起人によると、田舎の良さといわれる「隣近所の付き合い」も希薄になっていく予感があったという。そこで、気軽に出かけておしゃべりができる場所をつくろうと思い立った。

「気にかけたり、気にかけられたり、暖かいことばを耳にするとうれしいです。この日、この場所が、そんな機会になったらしあわせです」とは、初回を前にして、集落全戸に配布した手書きのちらしにある言葉。その後も、「暑気払いしましょ」「どんど焼きしましょ」などのタイトルと親しみを感じる文面で、地域の人に呼びかけてきた。すべて集落の有志の手づくりのお店だから、開催もマイペースなのがポイント。「手の届く範囲のことを、身近な人たちと」というスタンスこそ、着実に歩みを進めていく秘訣かもしれない。

相和の里の郷土食

蕎麦

28

米が貴重だった地域では、そばやうどんが主食として食べられてきた。篠窪地区で話を聞けば、昭和の終わり頃までは、米といえば陸稲で、夕食はそばが多かったという。冠婚葬祭の締めの料理にも、必ずそばが振る舞われた。「相和地域をそばの郷に」という目標を掲げ、平成 22 年には「そうわそばの会」が発足している。休耕地を利用して、栽培から手打ちそばづくりまでを担い、そばにまつわる研究に余念がない。1.5ha の耕作地は、しばらく放置された土地を甦らせた場所。やがて、そばの名産地として相和が知られることを目指して、地元の有志 30 名ほどが参加している。

郷土食

26

大根、人参、里芋などの根菜類、自家製の蒟蒻などを油で炒め、だしを加えて煮込んだすまし汁は、秋から冬にかけてのごちそう。体を芯からあたためるので、日々の食卓からおもてなしまで、広く食べられてきた。けんちん汁の由来は、中国から伝わった普茶料理の巻繊と呼ばれる料理のアレンジだという説のほかに、鎌倉の建長寺の修行僧がつくっていた「建長汁」がなまってけんちん汁となったという説も。山田の了義寺、篠窪の地福寺とも臨済宗建長寺派であり、この地で広く食されていることを思うと、「建長汁」説を支持したくなる。建長寺で、落としてしまった豆腐をきれいに洗って入れたことから崩し豆腐が不可欠になったというのも、大事なポイント。この豆腐に滋味深いだしが染み込んで格別な汁物に仕上がるのだ。

巻繊汁（けんちん）

米

27

かつて米は主食ではなかった。田んぼが少ない相和地域では、集落によっては近年まで、米はごちそうだった。そしていま再び、米の作り手は減って、「相和の米」は貴重なものになりつつある。大昔から稲作の地であった山田地区でも、今では自家用の米を育てる程度。だからこそ、田んぼにじっくりと向き合う稲作が可能にもなる。稲刈りが終わると、今では珍しくなった「はざかけ」をして、天日干しで米を乾燥させる。時間をかけてじっくりと水分が抜けた米は、うまみがぎゅっとつまっている。

30

八重桜の大部分は摘み取ってすぐに出荷されるが、家で塩漬け桜をつくることもできる。その場合も鮮度がポイント。あざやかなピンク色をした花びらは、洗わずに前年の梅を漬けた梅酢と塩に漬け込み、重石をして 1〜2 週間置いておく。その後、晴れた日に平ざるに広げて 1 日干して、新しい塩と混ぜてできあがり。できあがったら冷蔵庫に入れておけば、一年以上もつ。年間を通しておもてなしに使えて必ず喜ばれる、とっておきの保存食だ。

八重桜

栗

29

現在もみかん栽培が盛んな相和だが、かつてはさらに大規模にみかん畑が広がっていた。しかし、昭和 50 年代になると農業からサラリーマンに転向する人が増加。みかんよりも省力で栽培できる作目への転換がすすめられた。そこで導入されたもののひとつが栗。男たちが栗の栽培法を学んだのと同時に、農家の女たちは、渋皮煮をはじめとした栗のレシピとスイス製の便利な栗剥きを手に入れ、栗の産地はできあがった。渋皮煮に向くのは、大ぶりの粒が特徴の「出雲」という品種。毎年秋になると、各家庭で工夫をこらした渋皮煮がつくられる。あくの抜き方、砂糖の種類や量など、手間のかかる料理だからこその違いがおもしろい。できあがりを持ち寄って、にぎやかな食べ比べが、あちこちで行なわれている。

料理：國島 和子　料理撮影：黒田 知範（kurodaseisaku.com）
陶器：龍の背窯 山本 安朗　漆器：鈴木 友子（小田原漆器）

鎮守の森の椎木と巡るいのち

社を守る家族

赤田地区のシイノキの根元には、小さな社がある。この社は、丘のふもとにある家族が江戸時代から七代にわたり大切に護り続けてきた。その家の家主は代々、シイノキに宿る「だいじんごさん」と呼ばれる神さまを祀る役目を果たしているのだ。

年末には社の周りにしめ縄をはり、年越しそばをお供えする。年が明けた正月三が日には、お餅とお神酒をお供えし、灯明をつけて、「だいじんごさん」と静かな対話をする。社に続く道は昔、けもの道で道幅が狭く、祀りの日に雪が降っていることもあった。それでも途絶えることなく 200 年以上継承されてきたという。この家では子供の成長の節目には、シイノキに感謝をこめて、家族でお参りに行くのが習わしである。

この家で代々大切に祀り、護られてきたシイノキは、赤田地区の鎮守の神さまでもある。明治時代、この地で大きな火事があってシイノキまで火が及んだことがあったが、社の前で火が止まったという言い伝えが残っている。一方で、子供たちはシイノキの枝に登ったり、どんぐりをひろって遊んだりするのが当たり前。シイノキはこの地の住人にとって敬いの対象であると同時に、身近にあって親しみを感じる存在なのだ。ここにはシイノキと人々との深い絆、日本古来の自然と人とのかかわりが残っている。

01
赤田の鎮守の森の
シイノキ

09
三嶋社の樹齢
800 年のシイノキ

大井町史 別編　自然「大井町の植物」より

赤田のシイノキは正式には「スダジイ」という種類で、この地方のもともとの自然林である、常緑広葉樹林の主木である。相和地域にはこの赤田のほか、篠窪の三嶋社の境内、山田の了義寺の裏山などにスダジイ林が点在している。赤田のシイノキよりもさらに古い樹齢 800 年のシイノキがこの森にある。この森は日本の代表的な自然林で、いまや日本全体のなかでごくわずか、0.06%しか残っていないとされる、土地本来の貴重な森。相和地域に残る自然林は、いまや寺社の聖域として守られてきた場所だけに残されている「鎮守の森」なのである。

土地本来の森とは何だろうかと改めて考えてみる。落ち葉を集めて堆肥にしたり、薪にしたりする雑木林や、材木を得るためのスギやヒノキの林は、どちらも人の手が入った人工林である。それに対して自然林は、まだ人が住んでいなかった、太古の森の姿を残している、原生林のことである。相和の自然林の構成は、シイノキや、タブノキなどの大きな木の下に、ヤブツバキやアオキなどの中低木が生え、シャガ、キチジョウソウなどの下草が生えている。さらに視線を落とすと、生命の根幹ともいわれる「粘菌」など、菌類の貴重な宝庫が広がっている。鎮守の森は、地域固有の動植物が生きる、自然界の博物館なのである。

いま、人が森を守るとき

私たちが鎮守の森に立った時の安心感や深い安らぎは、その土地の幾層にも織り成された生物が育んだ、母なる自然の優しさを感じるからではないだろうか。鎮守の森との共生は、古くから自然災害と対峙してきた先人が育んできた知恵であり、伝統であった。自然との関わりが薄れつつある現代にあっても、鎮守の森は春の祭りの開催場所になり、防災避難地となるなど、身近な存在として息づいている。

世界的に有名な植物学者・南方熊楠は、明治時代の近代化により鎮守の森が失われていくことに対し「鎮守の森が消えることで、村民の郷土愛の心を損し、人情を薄くし、その地の史跡や天然記念物を失う」といった。相和に残る鎮守の森を見るとき、先人が残してきてくれた素晴らしい場所を、これからも守り伝えたいと決意を新たにする。

文：小宮 真一郎

篠窪地区に落ちていたシイの実
縄文時代には重要な食料であったと言われている

「おおいゆめの里」を育む

ゆめの里育て隊

おおいゆめの里とは、山田地区から柳地区にかけての土地約 19 ヘクタールの手入れされた里山。荒廃しつつあった山林を、散策可能な里山へと復活させる活動を「ゆめの里育て隊」が担ってきた。結成から 8 年を迎えた育て隊について、これまでの活動とつくりあげてきた里山の魅力を紹介する。

昆虫採集の森、こもれびの森、花木園などからなる「おおいゆめの里」は、四季を通じてあざやかに景色を変える大井町の観光スポットのひとつ。まるで里山のテーマパークともいわれる敷地内は、多くの人の手入れによって気持ちのいい空間が広がっている。（「03 早咲き桜と富士山」内地図参照）

そもそも「里山」とは人里に隣接し人の暮らしと密接に関わる、人と自然が交わる場所。かつて、集落の裏山の資源を利用してきた時代には、適度な人の手入れを当然として里山はあった。いま、山の恵みをあまり必要としなくなった時代に新しいかたちの里山を育てているのが、ボランティア団体「ゆめの里育て隊（以下、育て隊）」だ。

育て隊ができる前、ゆめの里エリアの整備は複数のボランティア組織が個々に行っていた。しかし、より魅力的な場をつくるために組織は合体。その後、育て隊は荒廃していた山林を里山に復元しながら、花木の植栽や散策路の整備などを地道に続けてきた。育て隊の理念は、自然環境を守るにとどまらず、集客し「里山を伝える」こと。未来を見据えて広大なエリアに目を配り、活動計画を立てている。

育て隊のメンバーは年配者が多いが、だからこそさまざまな技や経験を持ち寄って活動しているのも特長だ。大工や植木屋、農機具の扱いに精通した人などがおり、それぞれの作業によって専門知識のある人が先頭に立ち、知恵を出し合い、未経験の人にとっての指導役にもなれる。多様な人が集まる組織だからこそ、広範にわたる里山の手入れが可能になっている。

かつて、里山の整備も百姓の仕事のひとつだった。いまは一人で 100 の技を持つことは難しいかもしれない。しかし、それぞれの得意を持ち寄り、「みんなで百姓」となった育て隊は、ゆめの里をより良くしていく想いを引き継ぎながら、活動を続けていく。

イラスト：岡田 知子

ゆめの里育て隊

結成日：平成 21 年 9 月 18 日
隊長：柳川忠男さん
隊員数：38 人（平成 29 年 3 月 31 日現在）
活動時期：月に 1 回、土曜か日曜の午前中
問い合わせ先：大井町農業体験施設 四季の里
☎ 0465-82-3751
※入隊、随時募集中

ゆめの里の見どころ

早咲き桜：2 月中旬
水仙：1 月中旬
タチツボスミレ：3 月下旬
菜の花：2 月下旬
サルスベリ：8 月上旬

03
早咲き桜と
富士山